

巻頭言 「きょう救い主が生まれた！」

宇野 元

メルケル首相の気迫溢れる演説に、今年の春、彼女が「シリアスに受けとめましょう」と訴えた姿が重なります。「尋常でない状況にあるのですから、それに即した行動をとらなければなりません」(12月9日)。今回の演説にドイツの公共放送が「科学者の情熱」という見出しを掲げているのを見て、なるほどと思いました。

日本だけでなく、日々、多くの国の厳しい状況が伝えられています。また、指導者の軽はずみな言動によって感染が増えている国のことが報道されています。勇ましく映るふるまいが、実はどれほど有害であるか、民をどんなに危険な方向へ導くかが示されています。そのような熱狂はクリスチャンの間にも起こります。集会を開催する際に、勇気と共に理性を働かせたいものです。今、私たちは大きな共同体の一員として歩むよう求められているでしょう。そしてより深刻な地域と、その中にある教会をおぼえるよう招かれているでしょう。いろいろな制約が必要ですが、会堂に集える恵みを喜び、御言葉による希望をいただいて進んでまいりましょう。

世界恐慌。ファシズムの台頭。旧約聖書を認めない教会の登場。ユダヤ人迫害。難民の受け入れをめぐるスイス国内の葛藤。カール・バルトは非常に困難な時代とともにありました。第二次世界大戦。太平洋戦争が始まる1941年の6月には独ソ戦が勃発していました。その同じ日、彼は20歳の息子を登山事故で失う経験をしています。けれども、その年のクリスマスにこう書いています。

悪意と悲惨にみちた私たちの世は、きょう生まれた救い主によって担われ、あらゆる裁きと暗黒を通り抜けて神のみもとに運ばれる。「無神論者」でありたいと思う人がいる。また、自前の信仰に生きていたいと思う人がいる。その人には魅力があることなのだろう。どんな結果が得られるかは、本人の問題だ。しかし、その人にとって、もっと重要なことがある。その人に対しても、このことが不動の重さをもって語られている。「あなたがたのために、きょう救い主が生まれた！」

(カール・バルト『クリスマス』新教出版社)

コロナ危機の2020年。しかしこの年も、私たちはクリスマスをお祝いするのにじゅうぶんな理由を与えられております。救いの御子イエス・キリストが、この日、私たちの世界に贈られました。不動の恵みを「きょう」、心からお受けする者でありたいと思います。